

新しいかたちで「他」と繋がるには

馬に教わるリーダーシップ

第11話 生きる感覚を馬が与えてくれる理屈

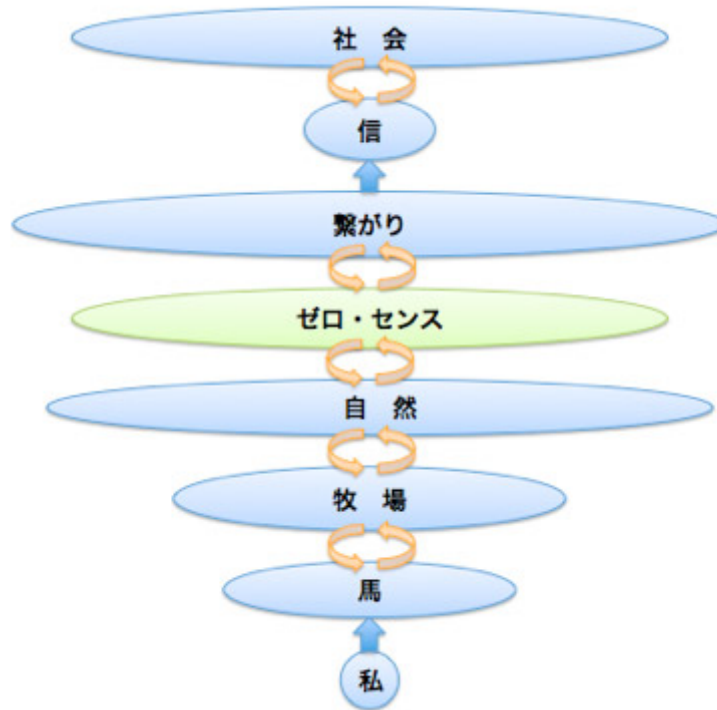
2015年2月26日（木） 小日向 素子

第10話では、組織に属する人の多くが「選択の自由」を重視して、「社会に最適化」することを求めるあまり、自分でも気がつかないうちに、あるいはむしろ自ら進んで自分の魂に「蓋」をしている、あるいは魂を殺してしまっているのではないかということ、私自身の例を引いて書いた。

今回から（やっと！）選択の自由の牢獄（安富教授の言葉では「ネクロフィリア・エコノミックス」）から脱出するための方策について書いていきたいと思う。私もまだOn the wayなので、どこまで行けるのか定かではないけれど、私自身を実験台に、また、見聞きする世界や日本の事例なども含めてこの連載で報告し、読者の方と共に考えていきたいと思っている。

いま私がいるモラトリアム状態（＝「選択の自由の牢獄」から「選択」が消えた状態）。ここから一歩進むためには、ネクロフィリア・エコノミックスモデルではないかたちで、社会と繋がり直す必要がある。その際に「ゼロ・センス」があれば、これまでとは全く違うかたちで社会と繋がれるのではないかと思っている。今回は、ゼロ・センス獲得モデルについて書きたいと思う。

いきなりですが、（ひとつの）答えとして下の図をご覧いただきたい。



これは、くうまさんが、大学や様々な集まりから請われて講義をするときに使っている「くうまモデル」である。ゼロ・センスを獲得するまでの道のりと、そこからさらに社会に繋がるまでの道のりが描かれている。「くうまモデル」とは、くうまさんが発明したモデルという意味ではなく、くうまさん自身がたどった道、という意味だそう。

ゼロ・センスがもたらす「他者との繋がり」

「私」が、馬という「命」に出会う。朝起きて、自分よりまず先に馬に餌をやることから始まり、厩舎の掃除、トレーニング、乗馬と、朝から晩まで馬の命に寄り添う。それは馬の言葉に寄り添い、コミュニケーションをすること。馬に必要とされ、それによって生かされていることを知る。

しばらくすると馬と私が存在している「牧場」という場に行きに行くようになる。そこには、さらに多様な「命」が存在していることに気がつく。犬、ヤギ、鳥、昆虫、あるいは寄生虫のこと。あるいは、馬の糞を畑の土にしていく、森の木々を馬の力を借りて切り出して柵や様々な道具をつくる、馬の力を借りて畑を耕す、といった活動を通じて、畑の作物や、森の木々、土地に応じた気候や風土のことを知り…命は繋がっており、終わりが無いことを感じるようになる。

「私」が生きることは、多様な「命」と共に、「自然」に支えられているのだと感じるようになる。

そこに、そこはかたなく「ゼロ・センス」が生まれてくる。生きるということに惹きつけられる、自分の中から湧き出る力だ。

ゼロ・センスがあふれ出ると、他の存在との「繋がり」を感じるようになる。

繋がりを感じるということは、繋がる相手、他者、何かを「信じる」ということができるようになることでもある。「私」が生きるためには、本当は「信じる」という力がとても大事だ。例えば、真っ暗闇の中を歩こうとしたら私の身体感覚を信じなければならぬし、何も襲ってこない、襲ってきても大丈夫だ、あるいは、周囲の何かは助けしてくれると信じなければならぬ。信じることが生きることの始まりだ。

すると「私」は「社会」という、人間が生み出した集まりの中でも生きていくことができるようになる、というのだ。

3年ほど前だったか、このモデルを見た瞬間、「これ、とても大事。私に欠落しているもの」と感じた。

何がどう大事なのか？

何がどう欠落しているのか？

私の場合、仕事を始めたときに、いきなり社会（仕事のルール）というものとぶつかってしまった感じ。その間が何にもない。学校教育では「社会」というものについて、知識だけは多少得ることができるのだけれど、どれもこれもそこから先への思考をしないまま、そんなことを想像する余裕などないまま、きてしまった。

「馬」や「牧場」という自然の中で共に存在している命についての理解、共感がとても弱いまま、いきなり「誰かが作ったルールが支配する社会」に飛び込んでしまったように思う。「ネクロフィリア・エコノミックス」モデルの「グローバル企

業編」を“素直に”実践して、その結果、社会に最適化はしている状態になった。けれども、社会と繋がってはいなかった。

人それぞれに合った方法がある

ゼロ・センスがないということは、
自分自身の存在、生きることへの確信が薄い。
他者を信じることもできないし、頼ることもできない。
頼っているのは「経済社会」という規範だけ。

そのルールからはじかれると生きていけないから、自分の魂を殺して無理矢理にでも社会に適合しようとする。会社（あるいは地域の集まりでもママ友でもいい）の人たちとの関係も見せかけのものになる。当然そんなところで生まれるチームワークは見せかけだ。

これもまた、私個人だけの特別な感想ではなく、多分、ほぼ全員の方が多かれ少なかれ、感覚的に「分かる」のではないだろうか？

昨年末、東京にいて毎日のように電車に乗ったのだけれど、なんと人身事故の多いこと！ 日本の年間自殺者は公式には約3万人だという。実は「自殺」と認定されるのにルールがあって、それに入らない自殺は、「変死」として処理されていて、その数も入れると、とても自殺が多い国だと聞く。大都会では（あるいは自然豊かで命の密度が高いはずの地域であっても）、「命」の存在が非常に希薄で、無縁社会と言われたりすることも関係しているかもしれない。

高齢者の無縁の死もどんどん増えているという。

これらの事実は、ゼロ・センスのない人たちがいかに多くあふれているか、ということを実証しているのではないだろうか？

さて、くうまモデルは、「馬」の力を借りて自然と繋がり、ゼロ・センスを獲得する。でも、私にとっては「馬と暮らす」という初めの一步が、あまりにも遠い。

手が届かない。それで、くうまさんに「ゼロ・センスを得る他の方法はないのだろうか？」と聞いてみた。答えは「馬でなくてもいい」であった。人それぞれに、自分に合った手法を見つければいいという。

「ふーん。馬以外でもっと簡単にゼロ・センスを獲得できる方法を考えたら、世紀の大発見かも！もちろん、私の魂が救われて、全く違う生きる力にあふれ出る人になれるかもしれないしね。一石二鳥だね！」

と、どこまでも世俗的で我欲の強い私（ゼロ・センスといかに遠いかがこの思考だけでもバレようというもの）。

よこしまな動機で俄然やる気の出た私は、くうまさんの牧場に潜入する。それは3年前のことだったわけだが…

今回は、ゼロ・センスを獲得するための馬以外のモデルについて書いてみようと思う。



｜ このコラムについて

馬に教わるリーダーシップ

外資系IT企業日本支社の部長としてマネジメントに奔走していた「私」は、リーマンショックに伴う業績悪化から突然解雇される。新規ビジネスの立ち上げを模索する中、以前から疑問を抱いていた

自分自身の統率力やコミュニケーション能力に向き合うきっかけがやってくる。それは偶然からの「馬」との出会いだった。

群れで生きる馬は、そのときどきの生存環境に最もふさわしい資質を持つリーダーに一期一会で従うという。言葉を理解しない馬と意思を疎通するうちに「私」は自分なりのリーダーシップ、そしてコミュニケーションの本質について学んでいく。

人間の振る舞いを鏡のように映し出す馬を通して、卓越したリーダーシップ、優れたチームワークとは何かを探し求めていくオン・ザ・ウェイの物語。